

平成22年4月16日現在

研究種目：基盤研究（B）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19320076  
 研究課題名（和文） 日韓プログラムのシームレスな通年予備教育カリキュラムの開発研究  
 研究課題名（英文） Research for Developing a Seamless One Year Preliminary Education Curriculum of the Japan-Korea Joint Scholarship Program  
 研究代表者  
 太田 亨（OTA AKIRA）  
 金沢大学・留学生センター・教授  
 研究者番号：40303317

研究成果の概要（和文）：本研究では、①日韓プログラムにおける「通年予備教育」用活動型シラバス試案を公表し、②日本の大学教員が韓国における前半期予備教育の現場に直接入って教育する「教育参画」を行いシラバス試案の教育的な効果を検証すること、の2点を目指した。また、『研究成果報告書』を刊行し、その結論部において、日本語教育、数学教育、物理教育、化学教育に分け表形式で簡潔に纏めた形で上記シラバス試案を提示した。

研究成果の概要（英文）：In the research period, we aimed to issue a tentative syllabus plan for a *Seamless One Year Preliminary Education Curriculum* of the Japan-Korea Joint Scholarship Program, and to verify its effectiveness, participating in the first semester preliminary education held in Seoul, South Korea. And we published a final research report, in which we presented, as a conclusion, the tentative syllabus mentioned above, regarding the Japanese language, Mathematics, Physics and Chemistry in a table.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	4,000,000	1,200,000	5,200,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：日本語教育制度・言語政策、日韓プログラム、通年予備教育

## 1. 研究開始当初の背景

日韓プログラム（正式名称：日韓共同理工系学部留学生事業）は、1998年10月の「日韓共同宣言－21世紀に向けた新たなパート

ナーシッパー」に基づいて開始され、「両国が、将来のより良い日韓関係のため日韓間の留学生・青少年交流が重要であることを再確認し、韓国の理工系学部留学生の派

遣・受入れ事業を共同で実施、今後10年を目途に、その時点で日本の理工系大学学部留学生が1,000人に達することを目標とする」(文部省学術国際局留学生課 1998)ことが趣旨とされている。

日韓プログラムは当初2010年までの計画であったが、2006年になって日韓双方の間でプログラムを延長することが決まった。この10年間に計1,024名の韓国からの留学生が延べ39校の日本の国立大学法人に在籍し、2005年3月からは日韓プログラム生の学部卒業が始まった。

日韓プログラムに関する研究は、本研究課題の代表者及び研究分担者や連携研究者のものを含め、様々な研究論文が発表されているが、それらでは「各大学における日韓プログラムの問題」を取り上げたものが多く、プログラム全体を俯瞰し日韓連携のための具体的な方策を提言するようなものはほとんどない。

また、プログラムの全体的な問題については、今までに計10回の「日韓プログラム全国協議会」が開催され議論されてきた。

第1回 大阪大学主催(2000年5月19日)

第2回 大阪大学主催(2001年9月21日)

第3回 大阪大学主催(2002年9月18日)

第4回 横浜国大主催(2003年7月23日)

第5回 東京工大主催(2004年7月23日)

第6回 広島大学主催(2005年7月20日)

第7回 金沢大学開催(2006年7月21日)

第8回 大阪大学開催(2007年7月20日)

第9回 横浜国大開催(2008年7月25日)

第10回 鹿児島大開催(2009年8月4日)

そのほかにも、富山大学(「日韓共同理工系学部留学生プログラムの現状と課題」2000.12.11)、琉球大学(「日韓共同理工系学部留学生事業研究会」2001.2.26)、金沢大学(「日韓 PML 課題検討会」

2002.2.15-16)、東京工業大学(「日韓共同理工系学部留学生プログラム意見交換会」2003.1.24)等で日韓プログラムを巡る個別の討論会や研究会も開催されてきたが、未だ本格的な連携につながるような活動には至っていない。

このような研究動向の中で、韓国側からの提言という形で本研究の連携研究者である茨城大学の安も加わった共同研究が行なわれ、日韓予備教育の連携が日本側に提示された。

本研究は、韓国側の研究に対する回答として、日韓協同で1年間のシームレスな「通年予備教育」を行なうための具体的な方策を示すものと位置づけられる。

上記の韓国側共同研究などの結果を踏まえつつ、これまでの個別研究で提言されている成果を統合し、実施可能なカリキュラム及び教授法・教材という形で日韓プログラムに参加する全ての大学に還元し共有する、という着想に至った。

## 2. 研究の目的

本研究では、日韓プログラムにおける1年間の予備教育期間の前半期・韓国側予備教育と後半期・日本側予備教育をあわせた、日本の大学に進学するための学力を効率よく学生につけさせるため、「通年予備教育」カリキュラムとそのシラバスを開発することを目的としている。

そのためには、3年間の課題研究期間の各年次目標を次のように定め、韓国側と日本側各大学共通で使える教育素材を全教科(日本語教育・数学・物理・化学)にわたり開発し公表することを目指した。

平成19年度:「シラバスや教材を検討し試案を作成する」

(1)韓国での予備教育を受けるプログラム

学生の学習全般をめぐる問題点の洗い出し

① 韓国の高校教科書と日本のものとの異同と予想される学習上の具体的な困難点

② 学習上及び教授法上の問題点

(2) 日韓予備教育連携のシラバス作り

③ 日韓対訳の語彙集と文法情報等のデータベース構築

④ 韓国側予備教育で使われてきたテスト等の資料の収集作業

⑤ アカデミック・ジャパニーズや専門教科各科目の立場から各シラバス案作成

平成20年度：「日韓双方で試案を実践するため、日本側メンバーが韓国側予備教育に参加し検証する」

(3) 日韓双予備教育連携のため連携教育法

⑥ 統一教材や共通テストを作成するとともに、成績情報を共有化する

⑦ シラバス案の中間報告を行う

⑧ 韓国側での予備教育に参加し作成したシラバス案に沿って教育実施

平成21年度：「実践経験をふまえて試案を修正し、教材・教授法の冊子版及びWeb版を公表する」

(4) 日韓プログラム通年予備教育カリキュラムとシラバス試案の公開

⑨ 韓国側での予備教育に参加し修正したシラバス案に沿って教育実践再試行

⑩ 改善された教材・教授法試案の最終版を冊子版とWeb (PDF) 版で公開

### 3. 研究の方法

(1) 韓国で予備教育を受けるプログラム

学生の学習全般をめぐる問題点を洗い出す

①研究代表者の太田及び連携研究者の安が海外研究協力者の金・趙ら（慶熙大）と協力して、韓国の高校で使用されている日本

語・数学・物理・化学等の教科書を集めてその内容の検討を行った。

また、韓国の高校における一般的な日本語教育・専門教科教育の状況を把握するため、韓国の教育科学技術部から発表されている教育に関するカリキュラムをホームページ等から入手し、韓国側の日本語教育・専門教科教育に対する全体的な考え方や学習者の日本語学習スタイル分析を行った。

②日韓プログラム生の日本語習得上の問題点を分析するため、韓国語と日本語の音声、語彙、文法、談話（会話の規則など）の共通点と相違点や部分的な「ずれ」などについて、安がこれまで発表した論文から調べあげた。その結果を基に、韓国における予備教育を受けた日韓プログラム予備教育修了生にアンケートを行い、そのデータと予測される問題点とをつきあわせる作業を行った。

(2) 日韓予備教育連携のシラバス作り

③研究分担者の菊池・小島・廣瀬（H19時点）が中心となり、専門科目のために韓国の数学・物理・化学の教科書を基に専門用語の日韓対訳版を作成のため、日韓両言語間に「共通する用語」、「部分的なずれがある用語」、「相違がある用語」を調べた。

④連携研究者の村岡・西村・門倉が海外共同研究者に協力を求め、これまでの予備教育の日本語指導に関する資料（教材、テストのコピー、学習者の日本語学習上の問題点に関する記録等）を提供してもらい、日本の各大学の予備教育機関が有効に活用するための方法を検討した。

⑤連携研究者のうち、門倉が別の研究課題「日本留学試験が日本語教育に及ぼす影響に関する調査・研究」（研究期間：2002-4、基盤研究(A)、一般、日本語教育、課題番号：14208022）で研究を進めてきた「アカデミ

ック・ジャパニーズ（大学での学習に必要な日本語力）」養成の立場から、また村岡が「専門日本語教育」の立場からの研究課題である「種々の理系専門分野における日本語論文作成方法の指導に関する基礎的研究」（研究期間：2002-5，基盤研究(C)，一般，日本語教育，課題番号：14580330)の研究成果から日韓プログラム日本語予備教育における日韓予備教育連携のためのシラバス作りに関する提言の素案を作成した。

(3) **日韓連携で試案を実践するための連**

**携教育「教育参画」**

⑥連携研究者の安・村岡・西村・門倉及び海外研究協力者の金・趙ら（慶熙大）が中心となって，韓国の予備教育機関において予備教育開始時と終了時に実施されてきたプレースメントテストとアチーブメントテストを収集し，日本側の予備教育で行われてきた同種のテストと対比させる作業を行った。

⑦作成したシラバス案の中間報告として，日韓プログラム通年予備教育用シラバス案（初版）を広く世に問うため，本研究課題の中間報告として学会での発表を行った。

⑧日本の予備教育機関に所属する太田・門倉（日本語教育）・菊池（数学）・が韓国に出講して直接予備教育に当たるため韓国を訪問し，慶熙大学校国際教育院での予備教育の一部の授業を担当する試み，「教育参画」を行った。海外研究協力者の金・趙ら（慶熙大）と適宜情報交換を行いながら実際に授業を担当した。授業内容は映像化するとともに，教育の内容を論文の形で公表した。

[4] **実践経験をふまえて試案を修正し，**

**シラバス案の冊子版・PDF版を公表する**

⑨平成20年度から行われた韓国予備教育機

関における教育参画の結果を踏まえて，各教科のシラバス案に適宜修正を行い，シラバス改訂版を作成した。作成されたシラバスに沿って太田・門倉・菊池（以上，同上）・藤田（物理）・古城（生活指導）で再度，慶熙大学校国際教育院での予備教育の一部に参加し，シラバス案改訂版の最終的な調整を行った。そして，日本に持ち帰ったシラバス案改訂版最終版をもとにして，研究組織全メンバーにより，教科ごとのカリキュラムとして全体をまとめた。

⑩出来上がった最終的なカリキュラム・シラバス案を冊子版・PDFダウンロード版として公表し，日韓プログラムに参加する日本国内の大学及び，研究協力者を含む韓国側プログラム関係者に向けて提示した。

最後に，研究の全体的な流れを図示したものが次の図1である。

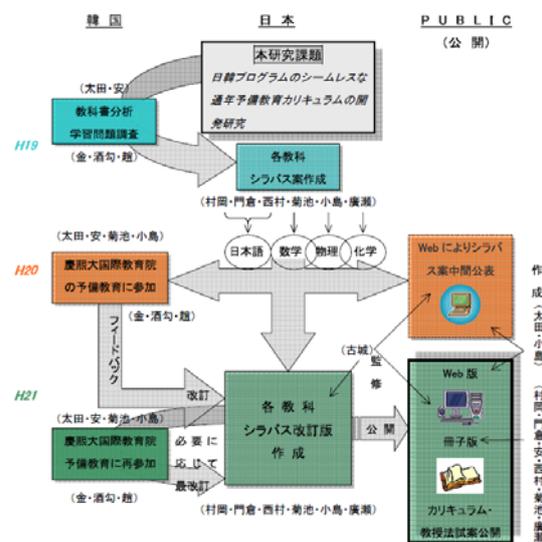


図1 研究方法の流れ

4. 研究成果

本研究により『研究成果報告書』（図2）を作成・刊行し，その結論部で「日韓プログラム通年予備教育用活動型シラバス試案」を公表した（表1）。このシラバスは，日韓プログラムに参加するすべての大学での予備教育に応用可能となるよう，日本語教育，数学教育，物理教育，化学教育（但し，今回は前半期予備教育分のみ）の活動指針を提示し

たものである。

また、本シラバス試案を提示するに当たっては、前半期予備教育（韓国・ソウル市・慶熙大学校国際教育院）において、日本からの教員が直接指導を行う「教育参画」を2008～2009年の2年間に亘って行い、シラバス試案により一定程度教育効果が上がり、妥当性を持つことを確認した。



図2 研究成果報告書

表1 通年予備教育用シラバス案

総合最終到達目標		日韓プログラム生が配置される日本の各大学の学部に入學可能となるような、各教科で必要十分な学力を養成すること	
		前半期予備教育(韓国)	後半期予備教育(日本)
日本語	全般的レベル (ゼロスタートの場合)	ゼロ → 中級前半	中級後半 → 上級前半
技能別重点スキル	漢字	初級レベル500字前後(読み・書き)	中級レベル以降1,000字以降(読み)
	読解	文～段落単位の精読と内容要約	段落～文章単位の速読・多読
	聴解	単語・語・文レベルの ディクテーション	ナチュラルスピードによる多聴 → ノートテイキング
	口頭表現	日本語による身近な題材の発表 (自己や家族紹介、韓国紹介、等)	日本語により論理的な内容について発表 (調査報告、レポート発表、等)
	記述表現	短文～段落レベルの日本語作文 * 韓国語によるレポート演習 *	→ 日本語によるレポート演習
数学	韓国語で記述式解答演習 韓国語で総合問題解答演習 日本語で数学用語及び論理表現習得	日本語で記述式解答演習 日本語で総合問題解答演習 大学への構造的講義及び演習	
物理	高校で履修した内容(力学、電磁気学、熱力学、等)の基礎固め 日本語による物理用語・単位系の学習	日本語による物理科日履修・問題演習 大学共通教育レベルの基礎物理演習	
化学	日本語による化学用語・物質名の学習		

### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計4件)

- ① 太田亨, 門倉正美, 安龍洙, 酒勾康裕 (2008) 「大学入学前予備教育における日韓連携カリキュラムの試み～日韓プログラムの歩みから～」、『日本語教育学世界大会2008予稿集1』, 釜山外国語大学校, pp. 210-213, 査読有
- ② 太田亨, 門倉正美, 菊池和徳 (2009) 「日韓プログラム「通年予備教育カリキュラム」のための前半期予備教育シラバス試案検証へ向けた「教育実践」について」、『金沢大学留学生センター紀要』, 第12号, pp. 9-23, 査読有
- ③ 酒勾康裕, 安龍洙, 金重燮, 趙顯龍 (2009) 「韓国人学習者の日本留学に対するレディネス及びニーズの分析-日韓共同理工系学部留学生事業第9期生を中心として-」、『近畿大学語学教育部紀要』, 第9巻・第1号, pp. 65-88, 査読有
- ④ 太田亨, 門倉正美, 菊池和徳, 藤田清士, 古城紀雄 (2010) 「日韓プログラム・通年予備教育カリキュラムのための第2回教育参画実践について」、『金沢大学留学生センター紀要』, 第13号, 印刷中, 査読有

〔学会発表〕(計1件)

- ① 太田亨, 門倉正美, 安龍洙, 酒勾康裕 「大学入学前予備教育における日韓連携カリキュラムの試み～日韓プログラムの歩みから～」, 2008年7月12日, 釜山外国語大学校 (大韓民国釜山広域市)

〔図書〕(計1件)

- ① 太田亨, 日韓プログラムのシームレスな通年予備教育カリキュラムの開発研究・研究成果報告書, 金沢大学留学生センター, 2010年, 142頁

〔その他〕  
ホームページ等

『日韓プログラムのシームレスな通年予備教育カリキュラムの開発研究・研究成果報告書』

[http://isc.ge.kanazawa-u.ac.jp/publications/pdf/JK\\_grant\\_report2010.pdf](http://isc.ge.kanazawa-u.ac.jp/publications/pdf/JK_grant_report2010.pdf)

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

太田 亨 (OTA AKIRA)  
金沢大学・留学生センター・教授  
研究者番号：40303317

### (2) 研究分担者

小島 聡 (KOJIMA SATOSHI)  
東京工業大学・留学生センター・准教授  
研究者番号：00202060

廣瀬 幸夫 (HIROSE SACHIO)  
東京工業大学・留学生センター・教授  
研究者番号：80313378

### (3) 連携研究者

門倉 正美 (KADOKURA MASAMI)  
横浜国立大学・留学生センター・教授  
研究者番号：80127753  
(H19→H20：研究分担者)

村岡 貴子 (MURAOKA TAKAKO)  
大阪大学・留学生センター・教授  
研究者番号：30243744  
(H19→H20：研究分担者)

西村 謙一 (NISHIMURA KEN-ICHI)  
大阪大学・留学生センター・准教授  
研究者番号：40237722  
(H19→H20：研究分担者)

安 龍洙 (AN YONG SU)  
茨城大学・留学生センター・教授  
研究者番号：80361286  
(H19→H20：研究分担者)

菊池 和徳 (KIKUCHI KAZUNORI)  
大阪大学大学院・理学研究科・講師  
研究者番号：40252572  
(H19→H20：研究分担者)

藤田 清士 (FUJITA KIYOSHI)  
大阪大学大学院・工学研究科・講師  
研究者番号：00283862

酒匂 康裕 (SAKAWA YASUHIRO)  
近畿大学・語学教育部・講師  
研究者番号：00510497

古城 紀雄 (FURUSHIRO NORIO)  
大阪大学・免疫学フロンティア研究センター・特任教授

研究者番号：50029188  
(H19→H20：研究分担者)

### (4) 海外研究協力者

金 重燮 (KIM JUNG SUP)  
慶熙大学校・国際教育院・院長

趙 顯龍 (CHO HYUN YONG)  
慶熙大学校・国際教育院・教学部長

真貴志 順子 (MAKISHI JUNKO)  
慶熙大学校・国際教育院・日本語講師